

木曾三川下流域の水生植物

浜島 繁隆

木曾、長良、揖斐の三つの川は、濃尾平野の西部を流れ、ほぼ同一地点で伊勢湾に注ぐことから、一つの水系のように考え木曾三川と呼ばれている。この下流域は、恵まれた水から水田が開かれたことで、水路が多くみられ、水生植物に適した環境を備えている。浜島(1973, 1977, 1983)はこの地域の水生植物の分布、生態について報告した。しかし、木曾三川については、河口域について清水(1965)の報告があるが、今迄にまとまった調査研究はされていない。1983年8月～10月にかけ、岸辺の湿生植物も含め、河口より上流約23kmの範囲で、32の地点において水生植物の分布を調査したのでその概要を報告する。

なお、1987年、河口より約14kmの治水神社を中心とする地域が、国営木曾三川公園として整備されたことで、今後、周辺的环境も変化することが予想される。

1. 湿生、抽水植物の分布(図2)

調査地域は、海水が遡上するため、河口域でその影響が植物の分布に現われている。河口より4km木曾川右岸の砂浜に、海浜植物のハマヒルガオ、ハマエンドウ、オカヒジキ、ハマナデシコが残存し、かつての自然の岸辺の様子を知る手がかりとなっている。塩性の湿地に生育するシオクグやウラギクは、三河川とも7～8km上流まで分布している。このような岸辺には、ヨシ群落の内側にアイアシの群落がところどころに発達している。清水(1965)がイセウキヤガラを発見したのは、河口より約4km付近の岸辺で、満潮時に水没する場所である。しかし、その後、護岸改修工事で絶滅したものと思われる。

ヨシと比べ大形のセイタカヨシの分布は、長良川で約7km、揖斐川で約10km、木曾川で約17km上り上流域に点在している。特に、木曾川右岸の背割堤に大きな群落が発達している。

岸辺に生育する植物は、近年の護岸改修工事で姿を消しつつあるものが多い。その一つの例がタコノアシである。今回の調査で木曾川右岸17.5km、左岸20.5km、揖斐川右岸12kmと15kmの4地点で生育が確認された。その他、関東以西に分布する常緑のミズタガラシが、本地域では三河川とも約12km地点より上流部で比較的多く生育

していることが明らかになった。

2. 浮葉、沈水植物の分布(図3)

今回の調査で、32地点中20地点で浮遊植物も含め、なんらかの浮葉、沈水植物がみられ、その種類数は17種であった。これらは、流速が大きく水底の不安定な本流中にはほとんどみられず、岸辺のヨシ群落の中や高水敷中の水路、ワンド、池などに生育していた。例えば、長良川左岸9.5km地点で、高水敷に水路を導いて作った船だまりには、エビモ、セキショウモ、ホザキノフサモ、クロモ、コカナダモ、ホソバミズヒキモ、センニンモの7種が生育していた。また、治水神社近く、長良川右岸のヨシ群落の内側の水路にセキショウモ、クロモ、コカナダモ、センニンモ、オオカナダモと漂着したフサジュンサイがみられた。

河口から約13km地点より約12kmにわたり、木曾川と長良川の二つの川を分流するために設けられた背割堤がある。この堤は、オランダ人技師の指導によりいくつかのケレップ水制が作られている。堤より本流に向かって、櫛の歯状につき出た水制は、水の流れをゆるやかにすると同時に、水制の上流側に多くの土砂を堆積させた。このような場所にはヤナギ林が発達し、自然度の高い岸辺の植生をみることが出来る。また、ところどころの低地は小さな池や沼となり、水生植物が生育している。コウガイモ、オオカナダモ、コカナダモ、クロモ、ヒシ、ヒメビシなどがこのような池や沼に生育する種類である。

文献

- 清水建美(1965) 木曾三川河口部付近における水生植物のフロラと生態 木曾三川河口資源調査報告, 2, 579-593.
- 浜島繁隆(1973) 木曾川下流域の水生植物の生態学的研究, 北陸の植物 21(1): 14-18.
- (1977) 濃尾平野の大形水生植物とその生態, 愛知県私学教育研究集録 11: 142-149.
- (1983) 濃尾平野における農業用水路の水生雑草の分布と2, 3の環境要因, 雑草研究 28(4): 38-41.

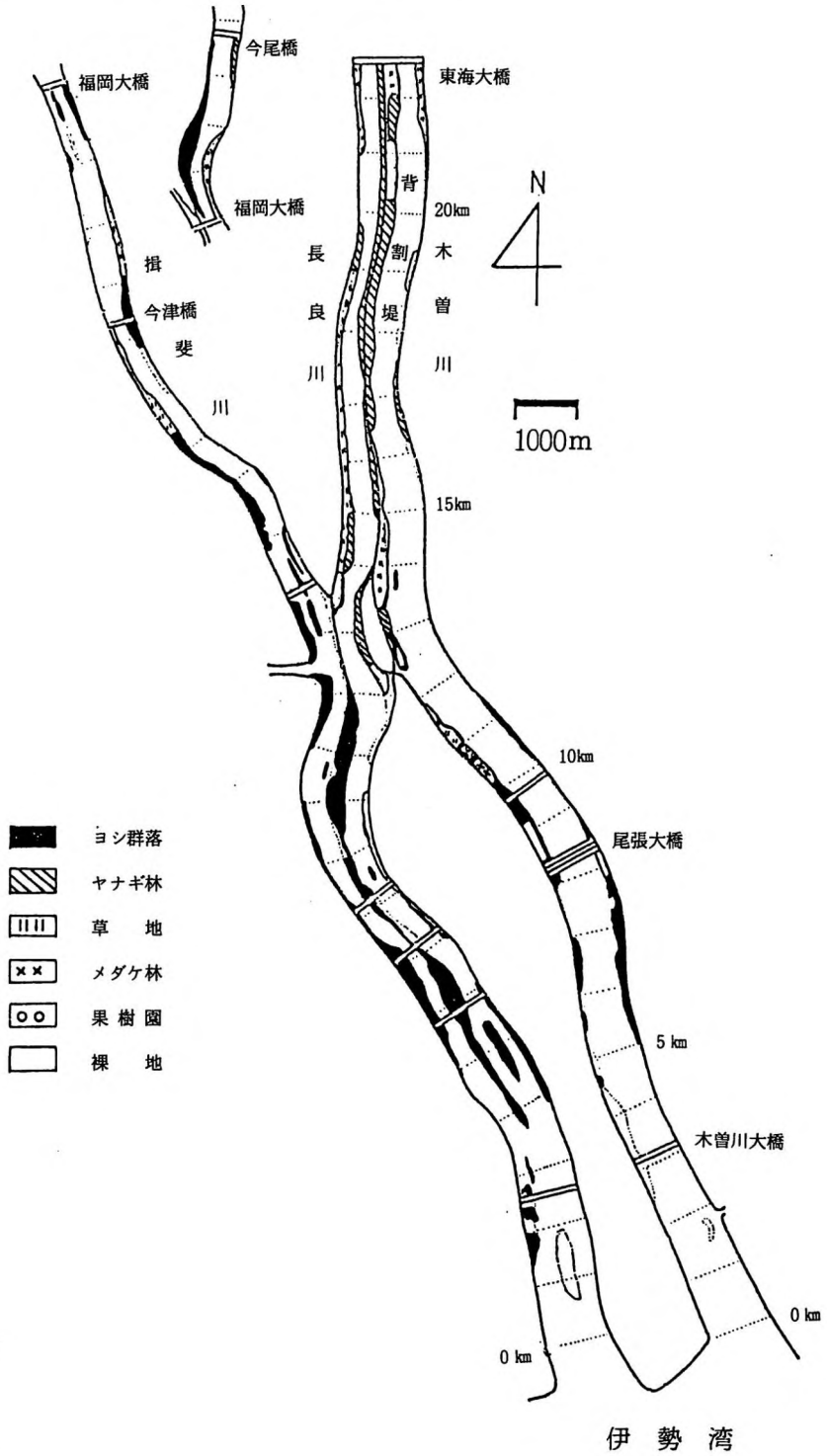


図1. 岸辺の植生

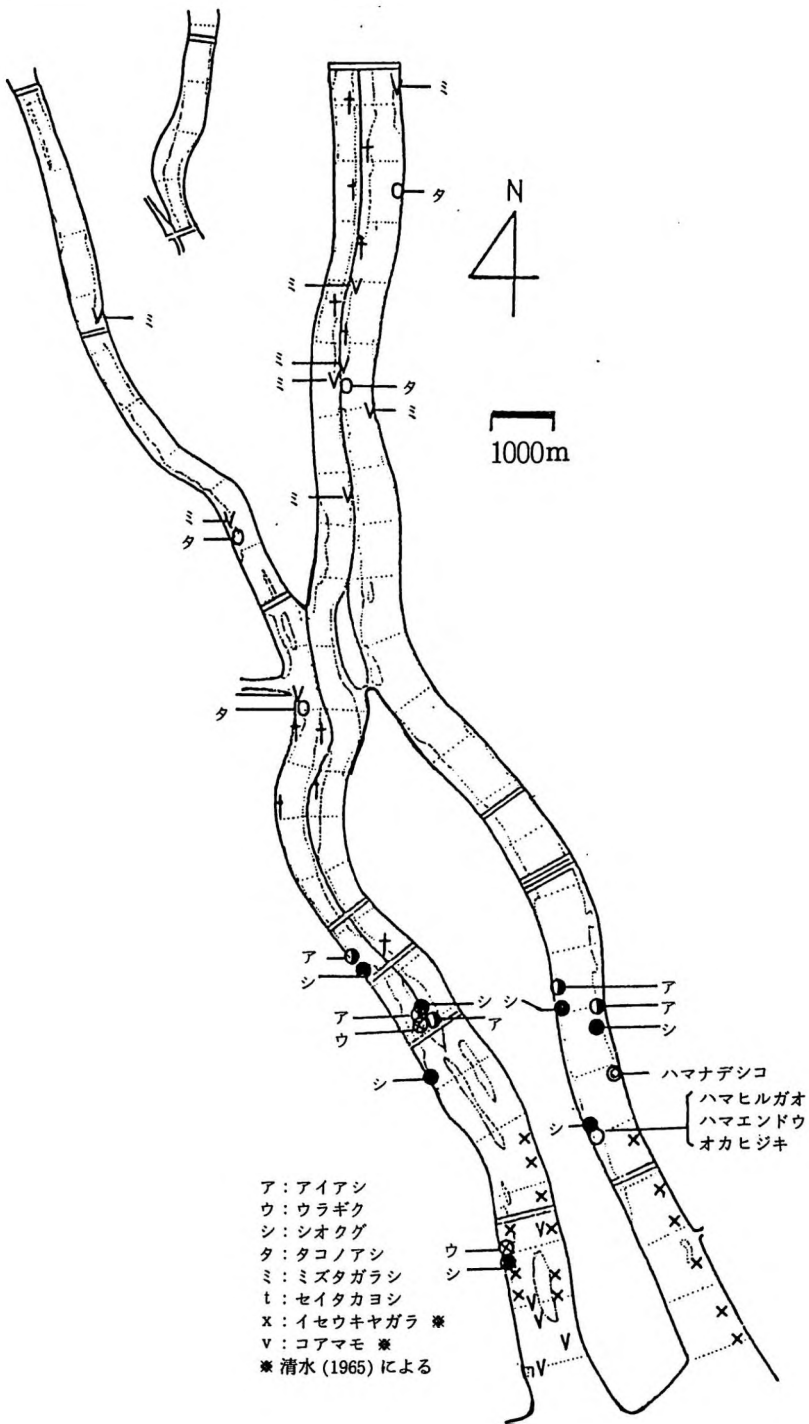


図2. 湿生、抽水植物の分布

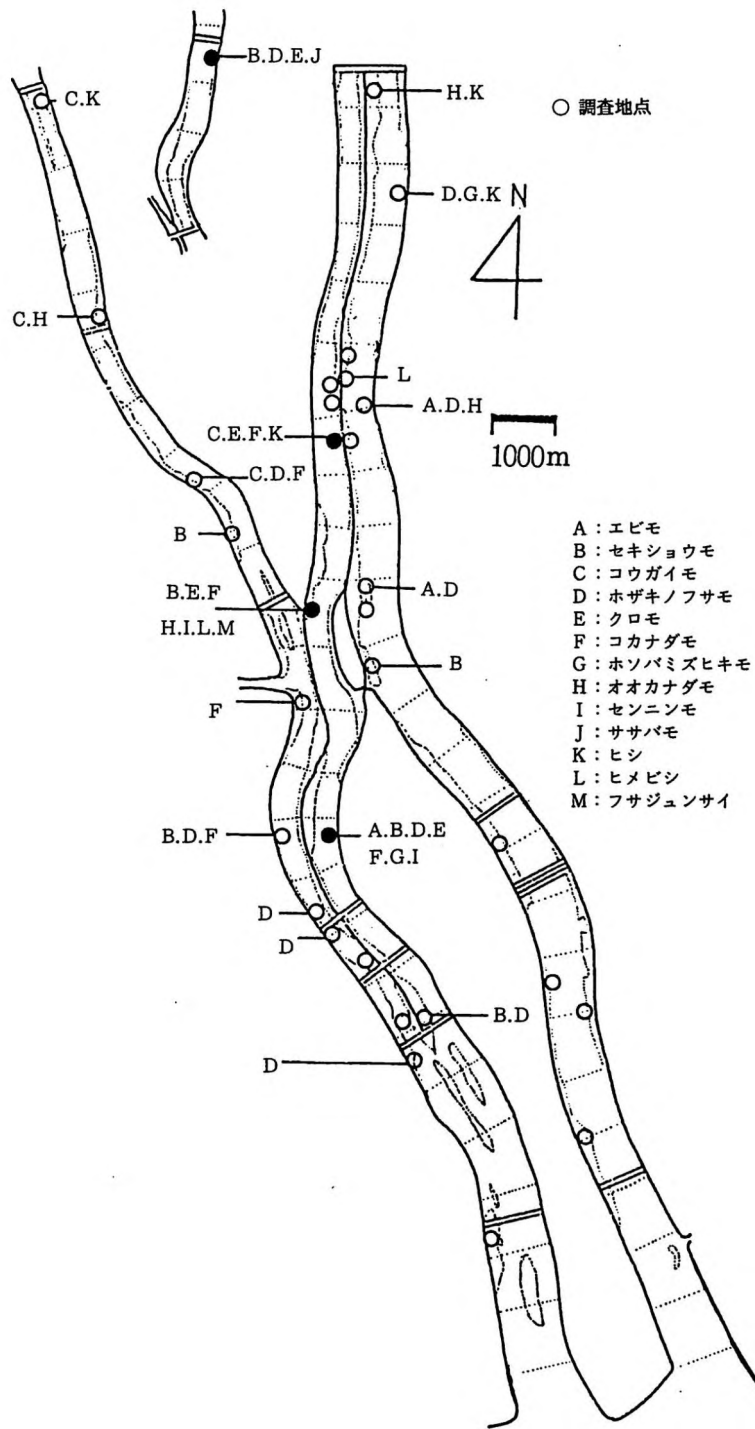


図3. 浮葉・沈水植物の分布